

## 戦時下における紙芝居に関する議論 —雑誌『紙芝居』を中心に—

鬢 櫛 久美子  
野 崎 真 琴

### はじめに

本研究は、紙芝居と保育との関係、保育における紙芝居について解明していくことを目的としており、その取り掛かりとして、これまで両者の関係について歴史的に明らかにすることを試みてきた。<sup>(1)</sup>

街頭紙芝居として誕生した紙芝居は、戦前から戦後にかけて街頭で演じられ子ども達の娯楽として取り扱われた。その一方で、子ども達を魅了する紙芝居を教育的に活用しようとする動きが起こり、保育界では、倉橋惣三や副島ハマらが紙芝居の草創期からその魅力に注目し、保育実践の場に取り入れていたことが、これまでの研究の取組の過程で明らかになった。また、戦後については、小学校以上の学校現場では紙芝居が扱われなくなったが、1948(昭和23)年刊行の『保育要領』では紙芝居が僅かの箇所では取り上げられており、保育教材として保育制度上はじめて位置づけられたことも確認できた。しかし、紙芝居と保育との歴史的接点については、不明な点も多く、資料収集とともにその限られた資料を基に解明作業を地道に継続していく必要がある。

紙芝居の歴史については、先行研究においても様々成果が残されており、特に鈴木常勝氏により戦時下における紙芝居について詳細な研究が行われている。<sup>(2)</sup> 氏も指摘しているように、戦中に発行、活用された教育紙芝居については、戦後GHQの「軍国主義思想撲滅」の方針により処分が命じられたため、紙芝居研究の為の一次資料が少ないのも事実である。そのような中、本研究では、戦時下において、紙芝居の製作や普及等を積極的に担っていた「日本教育紙芝居協会」が刊行していた雑誌『紙芝居』に注目した。

### 1. 本研究の課題と対象の限定

本研究は、戦時下において、当時紙芝居に関するいかなる議論が展開されていたかについて明らかにすることを目的とする。1938(昭和13)年に松永健哉、青江舜次郎らが中心となって設立した日本教育紙芝居協会(以下、協会と記す)が毎月刊行していた機関紙『紙芝居』に注目し、これを読み解きながら、ここで論じられている内容を整理することを課題とした。

当雑誌には、協会関係者やそれ以外の様々な立場の人物が、記事の執筆者あるいは雑誌に掲載されている「座談会」の出席者として登場し、その言説が記録されている。戦時下という状況で、街頭、学校、常会などあらゆる場所で紙芝居実践が展開されているその渦中に、紙芝居について主にもどのようなことが語られ、議論され、そして記録されていたかということを把握する上で、貴重な資料になりうると考え、研究の対象として取り上げることとした。しかし、現存が確認されているものが限られているため、本研究が対象とするのも、原本を所蔵する機関と個人から全記事のコピーを入手できた表1に示す通りのものに限られる。1938年の創刊時より『教育紙芝居』として刊行されていたものが、『紙芝居』に改題された1942年以降発刊のものである。

表1 本研究で対象とする雑誌『紙芝居』の範囲

発刊年	巻数	号数
1942(昭和17)年	5巻	1～2号、4～11号
1943(昭和18)年	6巻	1～12号
1944(昭和19)年	7巻	1号、4号、6～9号

さらに本稿では、雑誌『紙芝居』に収録されている記事の中でも、毎号ではないがしばしば掲載されている「座談会」での議論を中心に整理を行っ

た。理由は、戦時下における言論統制ゆえに発言や記録の制限が働いていたと考えられるが、複数の者が同席し、口述のやりとりで進行していく座談会形式の語らいの場では、発言者各々の考えが比較的ストレートに出やすかったのではないかと推察されるからである。また、戦時下といえども刻々と情勢が移り変わる中で、紙芝居に関してその時その時に語られる内容がよりリアルに把握されうのではないかと考えたためである。つまり、当時の紙芝居の実態を解明する上で、雑誌『紙芝居』を読み解くこと、なかんずくこの「座談会」に注目することに意義を認めたからである。

## 2. 日本教育紙芝居協会の成立と活動

協会は、紙芝居を教育目的に活用しようとする動きを推進するために、1938年7月20日に松永健哉（1907-1996）が「帝国少年団協会」の主事であった大島長三郎（作家・青江舜二郎）（1914-1991）と協力して設立し、戦中期に教育紙芝居の出版・普及を行った団体である。創設時のメンバーには、つづり方教育の推進者として知られる国分一太郎（1911-1985）、作家の堀尾青史（1914-1991）、宗教学者の佐木秋夫（1906-1988）がいた。

協会設立の中心的存在であった松永が紙芝居に携わるようになったのは、東京帝国大学在学中に東大セツルメントで児童教育に取り組んでいた頃のことである。後に「教育紙芝居運動」の先駆者といわれた今井よね（1897-1968）の福音紙芝居の販売活動でセツルメントに訪問してきた青年の紙芝居実演を見たことからである。松永は紙芝居の教化力に注目し、自らも1933（昭和8）年に松永自身が「最初教育紙芝居」と呼ぶ『人生案内』を製作し、実演活動を行うようになった。またこの『人生案内』は、松永らの教育実践グループ「児童問題研究会」の機関誌『児童問題研究』1934（昭和9）年1月号に付録として付けられた。

さらに1934年に大学を卒業し小学校教師となった松永は、1937（昭和12）年に「日本教育紙芝居連盟」（以下、連盟と記す）を結成した。連盟のメンバーは生活つづり方教育に携わる教師たちであり、自分で紙芝居の郵送費を負担し教室で子どもたちに見せていた。この頃松永は、教師間での紙芝居の交流や生活に根付いた教育の推進を目指

していた。

協会は、この連盟を母体としてかつその規模を拡大した形で設立された。会員は、幼稚園、国民学校、青年学校、宗教、村役場、農会、産業組合などの範囲にまで及び、紙芝居に関する研究、製作、配給、指導を行った。活動は戦時下における時局の影響を受けながら展開されていくこととなり、戦争の影響が強まると、戦争に協力する国民教化を目的とした「国策紙芝居」の製作・普及に専念していくようになった。

## 3. 雑誌『紙芝居』の刊行とその目的

先述の通り、入手できた資料が限られているため、1938（昭和13）年の創刊時の経緯については不明であるが、当初は『教育紙芝居』として発刊されていたものが、1942（昭和17）年1月号より『紙芝居』に改題されたことが、当該誌上に記されている。また、その改題の経緯及び『紙芝居』発刊の目的についても、協会からの「会員の方々へのお知らせ」として当該誌上に記載されているので、以下に紹介する。（下線は筆者による。）

本誌が、かくなりますまでの経緯を簡略に申し上げますと、御承知の雑誌統合方針に因り教育界の雑誌は當局の斡旋で二十九種に減定され（従来百二十餘種）、この二十九種の中に、優良誌として本誌の前身「教育紙芝居」が撰定されました。乃ち「教育紙芝居」は他の教育雑誌四種を併合吸収して、こゝに「紙芝居」と改題、内容、外観を整備して擴大強化したのであります。

右でお判りの如く、かくて本誌は日本唯一の紙芝居雑誌となりました。期するところは紙芝居運動の強化、浸潤、即ちわれらの紙芝居を以て社會文化を圓らんとするに在ります。従って本誌は紙芝居そのもの、本質向上を念とし、不斷にその指導、扶掖を責めとしつゝ、斯界の研究、鍊成、普及の機關たらんとするものであります。<sup>(3)</sup>

上段の内容からは、改題の経緯として、雑誌統廃合方針により、他の教育雑誌4種を併合吸収し、内容、外観を整備、拡大強化したものとして『紙芝居』に改題されたことがわかる。そして、下段にあるように、『紙芝居』は他の雑誌を統合し

たことにより「日本唯一の紙芝居雑誌」となったこと、雑誌の目的が、紙芝居の本質向上を目指し、紙芝居の指導、研究、練成、普及を進めることにありとしていることが理解できる。

この引用箇所のすぐ後に続く部分で、「本誌を仲介とする全国紙芝居愛好者既に七千を突破」との記述がある。また同号の別の箇所<sup>(4)</sup>で、「紙芝居を買ふには」と協会からの広告が掲載されており、そこには、「会員になると月々この雑誌『紙芝居』が無料配布され」との記述がある。これらの内容からも、『紙芝居』に関する雑誌としてかなり広く普及していたと考えられる。

なお、改題後の『紙芝居』の刊行目的や収録されている記事の内容が、改題前の『教育紙芝居』のそれとどう異なるのかについては、『教育紙芝居』についての資料が未入手である為、現時点においては検証できない。

#### 4. 雑誌『紙芝居』に携わっていた人物

##### (1) 『紙芝居』への改題時における日本教育紙芝居協会の役員

『教育紙芝居』が『紙芝居』に改題された当時の協会役員が、『紙芝居』第5巻1月号に掲載されているので、表2として以下に示す。

表2 『紙芝居』への改題時における日本教育紙芝居協会の役員

理事長	大島正徳
常任理事	安原清太郎、佐木秋夫
理事	大島長三郎、小柏丑二、河崎なつ、久保田萬太郎、倉橋惣三、中村喜一郎、古谷敬二、松原一彦、松永健哉、眞名子兵太、山田英吉
監事	成瀬正勝、相馬正男
参事	樋口長雄、本郷基繼
主事	砥上峰次

理事長の大島正徳(1880-1947)は、東京市教育局長、日本初の全国的な教育者団体である帝国教育会理事を務めた経験もある東大助教授であった。その他のメンバーたちも、主に教育関係者、行政関係者、政治家、作家等芸能関係者、常会関

係の有力者といった人物である。本研究が、これまで保育と紙芝居との歴史的接点について追究する中で注目してきた倉橋惣三も、協会の理事の一人としてここに名を連ねている。

##### (2) 雑誌の執筆者及び誌上「座談会」の出席者

次に、入手した雑誌記事の内容を見ていくと、協会役員の中に、記事の執筆者としてあるいは誌上で掲載されている「座談会」の出席者としても携わっている者もいることが確認できた。また、協会役員以外で、執筆者や「座談会」の出席者となっている者には、作家、画家、劇評家等の芸能関係者、国民学校や青年学校等の校長、教員等の学校関係者、常会長などの地域の有力者、陸・海軍や文部省等行政組織に所属する人物が多い。

以上、協会役員や役員以外で雑誌に携わっていた人物たちの属性等を見ていくことでも、雑誌が「国策紙芝居」の研究、製作、普及の任を担っていたことが理解される。

#### 5. 雑誌『紙芝居』にみる紙芝居の議論

##### 一誌上「座談会」の議論を中心に一

雑誌に掲載されている紙芝居に関する議論の内容にはどのようなものがあったのかを概観した上で、本稿ではとくに誌上「座談会」の議論を中心に整理する。紙芝居についてどのような視点で論じられているか、またその論じられ方には変化が見られるか、そのような問いを念頭におきつつ整理を試みる。

##### (1) 雑誌『紙芝居』に掲載されている記事内容

本研究で対象としている発刊時期の『紙芝居』の記事内容について、個人が執筆したものや誌上「座談会」の中で論じられている内容を概観した。すると、紙芝居の文化あるいは芸術としての要素や価値を問う等、紙芝居の本質や特性に関する議論や、学校や保育現場等における教材・教具としての意義や問題、また学校だけでなく様々な領域における紙芝居の活用のあり方、さらには紙芝居の絵の描き方、脚本の作り方、演じ方等紙芝居を扱う際の方法・技術に関する内容等、紙芝居について様々な分野・立場の人たちが多様な角度から論じた記事が掲載されていることが把握できた。

なお、保育における紙芝居に関して論じているものは、川崎大治、副島ハマ、高橋五山らによる保育現場における紙芝居の実践報告や紙芝居の作り方、演じ方等紙芝居の扱い方に関する記事<sup>(5)</sup>や座談会の出席者としての発言<sup>(6)</sup>も若干見られるが、全体として教育・保育現場における紙芝居を論じているものは、小学校（本研究の対象時期においては国民学校）以上を対象としているものが大半で、保育に関するものは少ない。

また頁数の変化に関しては、1943年第6巻4月号より80頁から約50頁に減少、同巻6月号からは

さらに30数頁に減っていることが確認できた。戦況による紙資源の不足が直接的な要因であるが、掲載される内容もより戦時色の濃いものが目立つようになっている。

## （2）雑誌『紙芝居』に掲載されている「座談会」の議論

雑誌『紙芝居』に掲載されている各号の「座談会」について、そのタイトル、出席者、趣旨、議論の内容などを時系列で整理したものが表3である。

表3 雑誌『紙芝居』に掲載された「座談会」のタイトル・出席者・主旨・議論の内容等

巻数	号数	（全頁数）	＜座談会の趣旨＞
	＜タイトル＞		＜座談会の議論から＞（数字）内は掲載ページ
	＜出席者＞		※当該号における「座談会」以外の参照記事
1942（昭和17）年 第5巻			
第5巻	1月号	（全80頁）	<p>＜座談会の趣旨＞ 紙芝居の欠点について「攻撃」し将来の課題について語る。</p> <p>＜座談会の議論から＞ ・紙芝居の本質とは ・協会の紙芝居と街頭紙芝居の違い 紙芝居がなぜこんなに端的に進み要求されるか。安易な形式、そのために相当深く入りこんでゆく（10） （飯塚）「<u>現在紙芝居がうけているのは芸能飢渴の為</u>にうけているのだ。もし文化の程度が高かったら紙芝居はうけつけないと思ふ。」（11） （秋山）「紙芝居はもっと客観性を持たなければ発達しない。現在のやうに<u>宣伝や教訓</u>だけでは発達しない。もっと紙芝居に独自性を持たせたい」（11） （佐木）今後の課題として作家の「養成の機関を今進めている」 ※「皆さんへ」 「本誌を御覧になると、紙芝居と、紙芝居界の事が何でも判ります。 紙芝居は時局下の寵児、教育用、国策宣伝用をこえて今や文芸、美術作品の領域に迫り民衆文化の機関として家庭、集会、街頭にその可愛い姿が躍っています。……」</p>
第5巻	2月号	（全80頁）	<p>＜座談会の趣旨＞ 現在の紙芝居に大衆はどんな批判と注文をもっているか。</p> <p>＜座談会の議論から＞ （梅山）「<u>国策的なものや宣伝的なものはお役所から出たもので結構で、それ以外は文化、教養、義理人情日本的な感情を感情を養ふものの方に、殊に協会などではやって戴きたい</u>」（42） （鈴木）「協会でも本年度の方針としては、…大東亞戦に関する国民の決意を固めていく。そういったものを一本」…もう一つは<u>純粹娛樂それに藝術味</u>を加えて…（42） （鈴木）「今までは紙芝居そのものが時代に順応し時代と不離なものであつた。</p>



<p>(上記 7 名は、平常紙芝居を常会に利用している人たち) 鈴木景山 (協会脚本部) 柄澤敬次郎 (協会普及部)</p>	<p>社会情勢といふか國民の再組織といふか、例えば部落常会といふものが出来て、その発展して行く線に入つて紙芝居を伸して行つたために、<u>初めは國策物が主</u>になって入ってきた。それが独自のものとなって取り上げられたから<u>単に國策解説</u>といった部面でなく和楽の方にまで手が伸びて行く。従つて最近は人格の陶冶であるとか、修養に資するとかいつた部面以上に、<u>國民演劇的な領域にまで</u>伸びて来た訳です。」(46)</p>
<p><b>第 5 巻 4 月号 (全80頁)</b> <b>&lt;タイトル&gt;</b> <b>教えるものに教える会—婦人はかう云ふ紙芝居が欲しい—</b> <b>&lt;出席者&gt;</b> 山高しげり (評論家、大日本婦人会理事) 竹内茂代 (○学博士、同) 河崎なつ (評論家、同) 香川あや (栄養学園長) 中島昭子 (翼賛会秋田県支部 參與) (上記 5 名は、婦人生活態度の改善、農村工場労務の形式の改良について評論、指導している人たち) 大島正徳 (日本教育紙芝居協会理事長) 佐木秋夫 (同常任理事)</p>	<p><b>&lt;座談会の趣旨&gt;</b> 今の紙芝居の欠点、将来の婦人向き紙芝居に対する企画に関する婦人からの意見。</p> <p><b>&lt;座談会の議論から&gt;</b> (山高)「紙芝居も押しつけがましいのばかり造っていないで、大衆の声を反映して下さいよ。」(46)</p>
<p><b>第 5 巻 5 月号 (全80頁)</b> <b>&lt;タイトル&gt;</b> (特集 地方と紙芝居) <b>紙芝居を耕す (前橋市座談会)</b> <b>&lt;出席者&gt;</b> 石原(軍人援護会嘱託) 金子 (煥乎堂社員) 高城 (煥乎堂社員) 津久井 (前橋図書館長) 村田 (国民学校訓導) 奥野 (前橋図書館員) 栗林 (前橋市役所) 熊田 (国民学校訓導) 柳 (子○児童園主) 小林 (県振興課主事) 青木 (前橋市会議員前橋壮年隊參與) 櫻井 (理研前橋工場職工長) 関 (県刑事課巡查部長) 主催：群馬県常会研究会</p>	<p><b>&lt;座談会の趣旨&gt;</b> 紙芝居をいかに利用すべきか。</p> <p><b>&lt;座談会の議論から&gt;</b> ・紙芝居の教化性について 街頭紙芝居の功罪について 実演上の問題について (櫻井)「紙芝居は後に隠れてやる人があるが、矢張りたつていて、顔を見せていた方が張り合いがある。」(46)</p>
<p><b>第 5 巻 6 月号 (全80頁)</b> <b>&lt;タイトル&gt;</b> <b>話じゅつ・あの手・この手</b> <b>徳川夢聲氏に訊く話方座談会</b> <b>&lt;出席者&gt;</b> 徳川夢聲 砥上峯次 (協会普及部長) 右手悟浄 (普及部員) 柄澤敬次郎 (普及部員) 小林英一 (普及部員)</p>	<p><b>&lt;座談会の趣旨&gt;</b> 紙芝居の実演者 (協会の普及部員等) が、話術の大家徳川氏に教えを乞う。</p> <p>※「宣伝と娯楽」 国策ものは理屈ばかりで面白くない ※「新作月評」</p>

# 戦時下における紙芝居に関する議論

佐木秋夫（協会編輯部長） 鈴木景山（編輯部員）	面白くなければ宣伝、教化も逆効果
第5巻 7月号（全80頁） ＜タイトル＞ （特集 海洋に学ぶ）海（座談会） ＜出席者＞ 間庭建爾（海務院） 今村了之助（海軍中佐） 関屋健哉、上野喜一郎（東京商船教授） 志道吉次（水産技師） 高杉九馬一（三井物産） 松永健哉（協会理事） 相馬正男（協会監事）	＜座談会の趣旨＞ 国民の海洋に対する認識を深め、海に親しむ人が多く出るような語らい。  ＜座談会の議論から＞ ・海軍関係者より紙芝居の活用の仕方について 国防交通の会で使う、隣組で使う 船員養成に使う 日本の子どもは海を怖がるので、海軍に限らず水産・海運等一般の海事に対して認識を正しく持たせるために国民学校等で使う
第5巻 8月号（全80頁） ＜タイトル＞ （特集 演劇と紙芝居） 前進座の幹部と語る ＜出席者＞ 前進座俳優4名、文芸部、演出 （名前省略） 中村喜一郎、佐木秋夫（協会理事） 砥上峯次（協会主事） 鈴木景山（協会編集部） 秋山安三郎（劇評家）	＜座談会の趣旨＞ 演劇関係者より演劇における紙芝居の利用について語る。  ＜座談会の議論から＞ ・演劇に関係した紙芝居の利用 台詞の稽古、芝居の宣伝 ・芸術的価値と将来性 （長十郎）「芸術の方はもうちょっと…」 （中村）芸術の定義が問題。しかし、少なくとも先程の実演で…他のことを考えたり退屈を感じたりせずにいられることは、その意味で芸術といえる（16）
第5巻 9～11月号は座談会なし	※9月号より「巻頭言」が登場

1943（昭和18）年 第6巻	
<p>第6巻 1月号 （全80頁）</p> <p>&lt;タイトル&gt;</p> <p>紙芝居の現状を語る</p> <p>&lt;出席者&gt;</p> <p>秋田雨雀（劇作家）</p> <p>濱村米蔵（劇評家）</p> <p>河竹繁俊（早大教授同演劇博物館館長）</p> <p>山本久三郎（芸能文化 盟常務理事）</p> <p>大山功（東〇編輯部）</p> <p>大島萬世、納富乗之、西村晋一</p> <p style="text-align: right;">（劇作家）</p> <p>西村安芸子（劇作家）</p> <p>小寺融吉（舞踊研究家）</p> <p>羽田義郎（国民演劇主宰）</p> <p>桂華緑（落語家）</p> <p>司会：印南高一</p> <p style="text-align: right;">（早大演劇博物館副主事）</p> <p>中村喜一郎、佐木秋夫（協会理事）</p> <p>砥上峯次（協会普及部長）</p> <p>上村英雄（協会編輯部長）</p>	<p>&lt;座談会の趣旨&gt;</p> <p>芸能関係者、批評家を中心に様々紙芝居の現状について談義。</p> <p>&lt;座談会の議論から&gt;</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・教育紙芝居（協会）の沿革（2）</li> </ul> <p>絵と言葉が「助け合ってより高い境地に耳と眼と双方に訴える表現力を持って来た場合、それがはじめて紙芝居としてのいいものだと言える」（3）</p> <p>「たくさんの内容を盛込もうという欲が働く」（3）</p> <p>「自由な場面転換を考えなくちゃならぬ」（秋田）</p> <p>「演劇より映画の方に近い」（3）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・音声文化の開拓</li> </ul> <p>せりふの読み方、肉体芸術</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・伴奏</li> </ul> <p>伴奏、照明などが舞台の効果あったほうが良いか否か（5）</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・国民学校での活用（8）</li> </ul> <p>半数は課外授業で合っている。見せるより「作らせる」目的、共同的、授業の総合化</p> <p>※「巻頭言」</p> <p>少国民文化協会も紙芝居と正面から取り組む構え。</p> <p>街頭を中心に積極的な文化活動を開始することに</p> <p>紙芝居運動の全体を一貫する、徹底した理念に基く新しく強力な秩序づけ、強化拡大、再編成</p>

<p>第 6 巻 3 月号 (全80頁)</p> <p>&lt;タイトル&gt;</p> <p>学校紙芝居の現状を語る</p> <p>&lt;出席者&gt;</p> <p>中谷千歳</p> <p>(文部省国民教育局青少年教育課)</p> <p>倉橋惣三 (東京女子高等師範教授)</p> <p>松永健哉 (日本青少年教育研究所々員)</p> <p>柚木卯馬 (明治第二国民学校々長)</p> <p>赤羽廣雄 (青山師範訓導)</p> <p>平林博 (羽田国民学校訓導)</p> <p>砥上種樹 (錦華学院々長)</p> <p>橋本宏 (板橋第五国民学校訓導)</p> <p>上村英雄 (日本教育紙芝居協会編輯長)</p> <p>砥上峯次 (同普及部長)</p> <p>司会：佐木秋夫 (協会常務理事)</p>	<p>&lt;座談会の趣旨&gt;</p> <p>学校における紙芝居の活用について</p> <p>&lt;座談会の議論から&gt;</p> <p>愛知県「全県下の学校を全部県が主催になって進めている。全県下の学校の校長始め、中の中心的な委員の先生がまづ紙芝居と国民学校教育はどういう風に交渉を持たなければならぬか、新しい国民学校制度に則った本質的研究をやるが、つぎには作品をいかに配給したらいいかといふので、郡単位に分けて技術的研究をやり、また講習会も開き、……」</p> <p>教具と教材 (9)</p> <p>(松永) 読み方だけでなく人前で発表することに「総合的な非常にいろいろの好ましい面」がある (10)</p> <p>「…紙芝居を教材として使うということの最も大きな狙い所は紙芝居を使わなければ長時間を要するところを、紙芝居を使えば1時間で出来るといふような教育の武器として科学的な教授の道具としてやつぱり使わなければ不可ない。…」 (11)</p> <p>(松永) 「紙芝居の場合は、文部省その他の援助、庇護がなければ伸び難いといふことは、これは非常に大事なことなんだけれども、しかしその文部省自体の援助なり庇護といふものを促進するためには、どこまでも紙芝居に対する先覚的な人々の実践と根本的な研究といふものがグングン盛り上がり続けなければならぬであって、映画の場合なんかでもさうした歴史を辿っていると思ふのです。…」 (12)</p> <p>※「巻頭言」</p> <p>紙芝居の「活用を戦力増強の一点に集中せねば」</p>
<p>第 6 巻 4～10月号は座談会なし</p>	
<p>第 6 巻 11月号 (全32頁)</p> <p>&lt;タイトル&gt;</p> <p>決戦下に於ける紙芝居の在り方</p> <p>&lt;出席者&gt;</p> <p>(画家) 福田豊四郎</p> <p>西正世志</p> <p>小谷野半二</p> <p>野々口重</p> <p>(作家) 川崎大治</p> <p>大島萬世</p> <p>堀尾勉</p> <p>川島順平</p> <p>(批評家) 本山荻舟</p> <p>秋山安三郎</p> <p>(協会) 砥上峯次</p> <p>上村英生</p> <p>鈴木景山、</p> <p>北島英作</p> <p>永井二郎</p>	<p>&lt;座談会の趣旨&gt;</p> <p>芸術の分野に対して時局をわきまえない作品への批判がある。紙芝居に対しても同様の批判が向けられる中、決戦下においてどうあるべきか。</p> <p>&lt;座談会の議論から&gt;</p> <p>・紙芝居に対する批判、これからのあり方</p> <p>(永井) 「……紙芝居に対しても、相当辛辣な批評を最近屢々耳にするようであります。殊にある方面からは、紙芝居も弾丸であるといふ今日の段階において、身内に漲っているはち切れるやうな、力の張った逞ましい作品が欲しいが、どうもわれわれの知る限りでは必ずしもさうでないといふことを言われてゐるのみならず、今日の戦時下において認め難い作品さへあるといふ相当強硬な意思を表示されてゐる方もあるのであります。</p> <p>われわれはすでに国策に副った作品の製作に心がけていることはいふまでもないことでありますが、今日の座談会の中心を『決戦下における紙芝居の在り方』といふ題に置いたのも、實はかやうな要望に応えたい趣旨であります。」 (2)</p> <p>(砥上) 「これから先は、立派な精神のこもった思想戦の利器としての紙芝居をいかに有数適切に組織的に扱うかということが問題」 (3)</p> <p>・政治性と芸術性 (の一致)</p> <p>(川崎) 農村での紙芝居活動を通しての意見。「…肉付けのない作品はどんなに立派なことをいつてもそれが結局具体的な効果を持たないことを私たちが作家として考へる場合に、本当に芸術的な作品になっているものは政治性があること、本当の政治性は本当の芸術性と一致するものであることを考へて創作に携わらなければならないと気がついた。</p> <p>決戦下における紙芝居の在り方も、紙芝居がみなから熱望され、ばされるほどそのことが重要問題になってくるのではないかと思はれる、そしてその仕事の携はつて行く私たちとしては自分たち自身の練成といふことが非常に大事な</p>

	<p>問題になつて」(4)</p> <p>紙芝居も国家の戦争目的に</p> <p>(西)「…国民の眼底に一瞬と雖も血と汗を定着させておかなくちやならない段階であると思ふ。それを定着させることは文化人の務めだと思ふ。…われわれは絵描きだから芸術を最も大切にしたいと思っていますが、<u>芸術より大切なものは日本が勝つことだ</u>、日本が敗けてしまつて後にどんな立派な芸術があつても何にもならぬ、という意味において、これから先は、戦争が今日の絵を生む段階でなく、<u>結局戦争に勝つために紙芝居も生れ、絵も生れる時代だ</u>と思ひます。</p> <p>(略)</p> <p>私は過去一年間、自分も画家である関係上芸術を最も第一主義として進んで来て、さうしていまこの問題で非常に割切れない悩み、その悩みのために筆もよう取れなかったこともある、その点はいかがなものでせうか。」</p> <p>(上村)「…紙芝居を作っているのは国策にそふというのが第一目的である。<u>国策に副ふことを目的としているならば、その作品が一層効果をあげるために芸術的であれと</u>。…」(6)</p> <p>(福田)陸軍美術協会のアツツ島玉碎と『軍神の母』とを比較して「…どっちが國のために果すかになると、紙芝居に及ばないではないかと思ふ。これは芸術価値ではない。さういところに紙芝居のさつきいつた分相応の働らきがあるので、あまり大きなことをいつているよりさういふことの方が早いと思ひます。」</p> <p>(7)</p> <p>・娯楽性と指導性(7)</p> <p>(西)「以前は紙芝居は何所までも藝術だと思つてやつて来たんですが、今日ではさうではない。<u>娯楽性即指導性であり、指導性即娯楽性でなくちやならん</u>」</p> <p>(8)</p> <p>(大島)「<u>国策紙芝居と芸術紙芝居と、そんな分け方が成り立たん</u>」(8)</p> <p>・軍からの要望</p> <p>(北島)軍報道部の検閲について。「近頃段々軍の方が、紙芝居を今日の戦争の弾丸として認められて、いろいろこちらに対して注文を仰つたので、そのことを取次ぎますと、…何よりも戦争の實際が書いてないぢやないか、といふことを頻りにいつておられました。…</p> <p><u>紙芝居に対する理解が、いままで当局の方が受身であつたのが、逆にこつちが受け身になったやうな立場に置かれている</u>。それは漠然としているか知れませんが、検閲の仕事を持って行きますと、いろいろ注文が出るやうになった。元は単に検閲だけに過ぎなかつたのが、かうしてあゝして欲しいといふところまで来た。…」(10)</p> <p>※「巻頭言」</p> <p>「…「藝術」至上主義、趣味第一主義は存在の余地がない。紙芝居こそは全國民的、全大東亞的啓蒙宣伝要具の随一であり、こゝにこそ紙芝居の本質は最もよく發揮されるのである。紙芝居方向活動の超重點はこゝにこそおかれるべきであり、われらの全力はこのためにこそ捧げられるのであらう。」</p>
<p>第6巻 12月号 (全32頁)</p> <p>&lt;タイトル&gt;</p> <p>斯く要望す</p> <p>&lt;出席者&gt;</p> <p>大本営陸軍報道部 陸軍大尉 山内一郎編輯部員 西正世志 北島英作 鈴木景山 永井二郎 上村英生 (原本で出席者一覧を記載してある頁が抜けており、わかる範囲で挙げた。)</p>	<p>&lt;座談会の趣旨&gt;</p> <p>軍関係者の立場から紙芝居への要望。</p> <p>&lt;座談会の議論から&gt;</p> <p>(山内)「軍隊が紙芝居に要求したいことは澤山有りすぎて切りがない、といふのも要するに紙芝居が強さを持っているからです。」(8)</p> <p>(山内)「この協会の中に国策紙芝居課とか、聖戦目的完遂のための製作課と云つたものを作り、その道の権威を集めてやらなければならぬ。」</p> <p>紙芝居の結論を航空機増産にもつていく。航空機増産するためには食糧も増産しなければならぬ。<u>各々がその職域に奉公しなければならぬことを謳う</u>。(9)</p>



	※「巻頭言」 「十二月八日を期して決戦紙芝居を全国紙芝居人に配給「敵愾心を煽り、空への熱誠、増産への決意を昂揚」
--	---

1944 (昭和19) 年 第 7 卷	
第 7 卷 1 月号 (全32頁) <タイトル> 紙芝居は敢闘する <出席者> 千賀彰 (情報局芸能課) 坪内士行 (劇作家) 園池公功 (評論家) 大山功、鈴木景山、弘津千代 (協会)	<座談会の趣旨> 緊迫した時局における決戦段階に処する紙芝居の在り方、広く芸能界一般の在り方について語る。  <座談会の議論から> (鈴木)「決戦段階に処する紙芝居の作品の指向性、また広く芸能界一般の在り方について」(2) (千賀)「芸能は今までの遅れた体制を取戻して、本当に国民の精神を強靱に培ひ、どんなことがあつてもぐらつかない国民精神を速に築きあげるという点に重点をもつて来なければならない。 <u>もちろん芸能であるから、芸術的に満たさなければならないいろいろの点はますます強調しなければならず、いはゆる啓発宣伝のむき出しといふか、単なる啓発宣伝が時局の要請に応へる芸能の道かといへば決してさうではないと思ふ。とくに芸術的な要素はますます深く磨いていかななければならないことはいふまでもなく、平たくいへば芸術性といふものと変な言葉ですが政治性といふものが非常に鋭い形において一致して行くところに、芸能文化の上に特徴があることを勿論忘れてはいけな</u> いのですが、いまいつた意味に於ては、芸能全般の切替の体制が遅れているので、いまや決戦段階に入つて戦争の影響がひしひしとわれわれの身近にしまつてくる時代においては、この際芸能も早くそこに根を下して自分に課せられた任務を遂行して行かなければならない。」(2) (園池) 消費者の娯楽から生産者の娯楽へ (3) (坪内) 時局性と娯楽性を両方兼ねたもの。…子どもには勇敢な、あるいは科学的な思想を植えつけると共に、大人もその方面の良いものが出来れば興味を持ちながら明日の勇気をふるい起こすことになるのではないか。(3) (千賀)「…いかに端的に大衆の胸のうちに食入るかといふ技術」を紙芝居が学ばなければならないと思ふ。(4) (坪内)「われわれの要求するところは、いい絵で、いい説明者で深い印象を短かいところでぐつとやること」(5) (鈴木)「いい絵の問題ですが、手に取って見るといい絵でも舞台に入れると一向映えない。…一枚づつ取りあげてみると、何の感激も覚えませんが、舞台に入つて実演されると引摺り込まれる、そこに紙芝居の絵に対する秘密があると思ふ。」 (千賀)「紙芝居の絵は完結していたらだめ」(6) ※「芸術か弾丸か」(高木統他郎) 紙芝居に対する批評 最近数人の人から「近頃の紙芝居は面白くない」「御説教のような文句が多くて興味が無い」「何時も同じ型だ」というような事を聞いた。(10) 「政府の啓発宣伝はいい悪いはともかく、実際執務上、一面的、抽象的、法律的、命令的になり勝ちなのは心理経済から云つても止むを得ぬ事なのである。紙芝居はそれらを多面的に、具体的に、叙述的に、会話的に寧ろかの啓発宣伝を助成、補足し、より効果あらしむるよう普及すべき立場にあるのである。」
第 7 卷 4 月号	座談会なし

戦時下における紙芝居に関する議論

<p>第7巻 6月号  <b>&lt;タイトル&gt;</b>  <b>少年を海へ招く座談会</b>  <b>&lt;出席者&gt;</b>          岸和田普通海員養成所          所長、教頭、教官海軍中尉、教官          (名前省略)</p>	<p><b>&lt;座談会の趣旨&gt;</b>          海員養成所関係者より、少年が海に親しみをもてるような話、またそのための国民学校教員や父兄に願うこと。</p> <p><b>&lt;座談会の議論から&gt;</b>          紙芝居の話は全く出ない。最後のみ記者が「今回の海員充実運動にもご協力申し上げるつもり」          ・少年の父兄に希望すること          海員養成校は学校と同じこと学ぶ、しつづけを重視、生活費など全く不要かつ給与がもらえる          ・国民学校の先生へのお願い、父兄に特に伝えたいこと          海は怖いものではないということ</p>
<p><b>&lt;タイトル&gt;</b>  <b>勤労文化としての紙芝居</b>  <b>&lt;出席者&gt;</b>          古谷綱武（評論家）          宮澤義衛（安田銀行川崎支店長）          關英雄（童話作家）          浅野宗三郎（光明学校）          佐藤とき子（安田保善社）          工藤哥知子（社会教育協会）          向坂隆一郎（早稲田大学童話研究会）          納富康之、中村小坡（編集部）          小林英一（普及部）</p>	<p><b>&lt;座談会の趣旨&gt;</b>          勤労者のための紙芝居とは。</p> <p><b>&lt;座談会の議論から&gt;</b>          （宮澤）明るいものがほしい（13）          （古谷）その明るさは、かならずしも喜劇という意味にとらないで、見たあと、非常によい気持ちをつくってゆくということは、今切実に重要（13）          教養と趣味の紙芝居。与える紙芝居と自分で演じる紙芝居。言葉のしつけ。          （納富）慰安、趣味として見せるというだけでなく、勤労者自身が作る紙芝居ができてよい（16）</p>
<p>第7巻 7月号 座談会なし</p>	
<p>第7巻 8月号  <b>&lt;タイトル&gt;</b>  <b>紙芝居の方向を語る</b>          —企画陣の座談会—  <b>&lt;出席者&gt;</b>          土家由岐雄、野村直次（日本少国民文化協会）          相馬泰三（東亞國策画劇株式会社）          高橋五山（全甲社）          今井よね（紙芝居刊行会）          鈴木景山（日本教育紙芝居協会）          司会：佐木秋夫</p>	<p><b>&lt;座談会の趣旨&gt;</b>          紙芝居の製作、企画に携わる者として、紙芝居全体に関する将来の夢について。</p> <p><b>&lt;座談会の議論から&gt;</b>          人物の性格が分らない（11）          ・小国民もの          （佐木）善悪の葛藤を中心として扱う（12）          （高橋）「もっと局部的に考えて、実際生活を扱ってどれだけ子供の生活を指導してゆけるかと幼児の実生活を扱ってみようと思ひやり出したのが『ケンミン』…」（12）          ・婦人もの          （今井）婦人は子供のように喜ばない（13）          （高橋）もっと磨きをかけるとか。現在のものでは満足与えられない。（13）          紙芝居はほんとうの意味の面白味というものは年期を入れた玄人でなければできないというところまでゆくかと思われます（13）</p>
<p>第7巻 9月号 座談会なし</p>	

①「座談会」における紙芝居に関する議論の特徴  
「座談会」の中では紙芝居について主にどのようなことが語られ、議論されていたか、その内容について整理すると、以下のものに分類される。  
一つ目は、紙芝居の本質や特質などあり方そのものについて、「芸術性」、「政治性」、「娯楽性」、

「宣伝性」、「教化性」、「指導性」などをキーワードを用いながら問う議論である。その中では、紙芝居の現状について批判したり、将来の方向性やあり方を指摘したりしている。例えば、第5巻1月号や同巻5月号の座談会では、協会の紙芝居と街頭紙芝居を比較しながら紙芝居の本質やあり方

について論じていたり、第6巻11月号や第7巻1月号では、「政治性」と「芸術性」、「指導性」と「娯楽性」を対概念として紙芝居におけるその両者の関係について問うている。

二つ目は、紙芝居の様々な領域における活用の意義や利用価値についての議論である。学校関係者、常会関係者、演劇関係者、海軍関係者など様々な領域から、紙芝居の活用の実際における意義や問題・課題・要望が語られている。例えば、第5巻2月号、5月号では常会等地域での紙芝居活用についてその関係者たちの語らい、第5巻7号、第6巻12月号、第7巻6月号では海運や海軍の関係者からの紙芝居活用に関する要望、第5巻8月号では演劇の分野における紙芝居活用、第6巻3月号では学校における教材・教具等として紙芝居を活用する意義や問題と今後の在り方について議論されている。

三つ目は、紙芝居の作り方、演技方、描き方など紙芝居の扱い方についての議論である。作家や、画家、実演者を始め、紙芝居に携わっている者たちが紙芝居を扱う技術面について談議しているものである。例えば、第5巻6月号では、話術の大家を招いて紙芝居の実演者が教えを請う語らい、第6巻1月号では、紙芝居の読み方、実演の仕方、伴奏や照明の効果について論じている。

## ②「座談会」における紙芝居の論じられ方に見られる変化

次に、本研究がここで対象としている『紙芝居』発刊時期(1942年1月～1944年9月)の中で、「座談会」における紙芝居の論じられ方に変化が見られるかという点についてみていく。

本研究の対象時期の始めのうちは、他の芸術と比較したり、協会の紙芝居と街頭紙芝居との違いを比較したりしながら、紙芝居の芸術性等その本質や独自性を問う議論や、あるいはそれを高めるためにどうしたらよいかを論じているものも多い。時に紙芝居のあり方として国策紙芝居の問題点を指摘する発言もみられた。例えば、5巻1号で、随筆家の秋山は、「宣伝や教訓だけでは発達しない。…もっと独自性をもたせたい」と発言。また第5巻2号で大衆が紙芝居に持つ批判と注文というテーマでの座談会で、常会で紙芝居を利用し

ている産業組合の梅山は、「国策的なものや宣伝的なものはお役所から出たもので結構で…文化、教養、義理人情日本的な感情を養うもの…協会などではやって戴きたい」と発言し、これに対して協会脚本部の鈴木景山は、常会用の紙芝居について「本年度の方針として」、「大東亜戦に関する国民の決意を固め」るものと「純粹娯楽それに芸術味を加え」たものを出していきたいと答えている。国策紙芝居に片寄ることへの批判とも思える言動である。

また、紙芝居の芸術、芸能としての扱い方についても論じられてもいる。先に分類した、三つ目の内容に該当する。実演の仕方について、せりふの読み方だけでなく伴奏や照明などの効果についても議論している。

しかし、その後「座談会」が半年ほど掲載されない時期(1943年4～10月)を経て、1943年第6巻11月号に再び掲載された時から紙芝居について語られる論調に変化が見られた。当号の座談会では、時局をわきまえない紙芝居のあり方に対する批判が出ていることを受け止めて、紙芝居の目的・意義を何より国策協力に置くという前提で、紙芝居はいかにあるべきか、いかに扱われるべきかを議論する傾向が強まっているように受け取れる。その傾向は、その後の「座談会」の内容を見ていくとより顕著なものになっていくように思われる。

## おわりに

戦時下における紙芝居に関する議論について、今回雑誌『紙芝居』に注目し、その中のとくに「座談会」の内容を中心に整理し、そこで語られ、議論されていた内容と傾向に変化が見られるか検討した。今後も、雑誌『紙芝居』を読み解く作業を継続しながら、紙芝居に関する議論についてより正確な把握と整理を進めていきたい。

## 【注】

- (1) 髻櫛久美子・種市淳子「保育のなかの紙芝居－関屋友彦の福音紙芝居活動を通して－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第29号、2007年。  
髻櫛久美子・種市淳子「保育のなかの紙芝居－倉橋惣三と『紙芝居』の関わりを中心に－」

- 『名古屋柳城短期大学研究紀要』第28号、2006年。鬢櫛久美子・種市淳子「保育におけるメディアとしての紙芝居－紙芝居通史を中心に－」『名古屋柳城短期大学研究紀要』第27号、2005年。
- (2) 鈴木常勝『メディアとしての紙芝居』久山社、2005年。
- (3) 『紙芝居』第5巻1月号、1942年、66頁。
- (4) 前掲書、18頁。
- (5) 川崎の記事としては、第5巻4月号「農繁保育所と紙芝居(二)」、同巻5月号「農繁保育所と紙芝居(三)」、同巻9月号「村々に花咲く日－その一、農繁保育所－」、副島については、第5巻9月号「幼児保育」、高橋については第6巻7月号「折紙紙芝居の作り方」が掲載されている。
- (6) 川崎が第6巻11月号の座談会、高橋が第7巻7月号の座談会に登場している。



## A Study of Discussions about “*Kamishibai*” in Japan during World War II

Bingushi, Kumiko\*

Nozaki, Makoto\*

本研究は、戦時下において、当時紙芝居に関していかなる議論が展開されていたかを明らかにし、かつその議論の内容を整理することを目的としている。1938（昭和13）年に松永健哉らが設立し、戦時下において紙芝居の製作、普及、研究の任を担った、日本教育紙芝居協会が毎月発行していた機関紙『紙芝居』を検討対象とした。そこで掲載されている「座談会」の議論に注目した。紙芝居に関する議論の特徴を整理し、本研究で対象とする雑誌刊行の期間（1942年～1944年）の中で、紙芝居に関する論じられ方に変化がみられるか否かについて明らかにすることをも試みた。結果として、「座談会」における議論の内容については、大きくは、紙芝居の本質や特質などの議論、紙芝居のある領域における活用の意義や利用価値についての議論、紙芝居の作り方、演じ方、描き方など紙芝居の扱い方についての議論に整理された。また、議論のされ方に見られる変化については、1943年第6巻11月号から、時局をわきまえない紙芝居に対する批判が出ていることを受け止めて、紙芝居の使命を何より国策協力に置くという前提で紙芝居のあり方を議論する傾向が強くなっていくことが確認された。

キーワード：紙芝居，戦時下における議論，日本教育紙芝居協会，雑誌『紙芝居』